

特集

ひとりで悩まないで

認知症を認知する

不安ばかり先行した認知症
知識を身に付け関わりたい

母が認知症と診断される4、5年前のことです。母は、お金を並べて数えています。「お金がない」と言います。「8千円と1000円があるのよ」と言っても「いや、これは1000円と10円よ。これじゃ、買い物もできん」という母。でも母は、すぐに気付き笑っていたので私はあまり気にとめませんでした。

それから月日がたち、医師から「やっぱり認知症が始まっていますよ」と告げられました。母は「今日はえらい尋問を受けたが」と不安そうでした。「お母さん大丈夫よ。少し認知症になりよるかもしれないの」との言葉に「私はまだボケてはおらん」と言う母。それから間もなくでした。急に症状は進みました。ある時、母が昼食はいらなと言いましたが、お昼に行つてみると大変なことになっていました。

お茶やジュースなどいろいろなものを混ぜていました。床にはグラス、茶碗や瓶などをいっばい並べて、それに水を移す。子どもが水遊びをしている状態でした。その時の母の目は正常ではありませんでした。困ったような、恐ろし

そうな。そのつらそうな母の顔が今も忘れられません。

私はたまたま、役場の保健師さんに「私はどうしたらいいかわかりません。助けてください」と泣きながら電話しました。私は、保健師さんの「気軽にやっていきましよう。なんでも相談してください」との言葉にどれだけ助けられたか知れません。

それから、母のことを優しい気持ちで受け止め接することができるよう頑張ろうと思いました。

母を看取ることができた今も、いろいろあったことを振り返り、笑って話せることも反省すること、も、いっばい残してくれた母でした。

主人も、畑に行く母に、行かないよう注意したり、物を壊したことを叱ったり。あの時、怒らなくてもよかつたのではないか、好きにさせた方がよかつたのではないかなど、認知症のことをもう少し勉強して正しく認識していれば違った対処法もあつたのではないかと反省しきりです。

これからは認知症について勉強し、それに関わっていきたいと思っています。

※この手記は、町内在住の女性が、認知症になった義母との体験についてつづつたものです。